

専門的焼き物の知識を持つことで、消費者の信頼を得ることが急須のような特殊な物を売るコツになります。日本の急須の形はとても先進的です。特に茶葉の形状の変化によって茶漉しが研究されました。海外で比較されるものは中国の「茶壺」です。海外でもイーシンティーポット(宜興の茶壺)が早くから海外の茶店で売られていました。常滑では、明治期、清国から職人を招請して茶壺の製法を習得しようとしていました。日清戦争以後、京都では中国から茶師を招請して技術を習得していました。当時の中国急須の製法はしゃもじの様な道具で叩きながら作るものでした。今では石膏型の押し型を使っています。一方、四日市の万古焼では特別な木型で作っていました(提灯づくりの型を参考にした物)。いずれにしても時間のかかるものでした。常滑では、中国の陶工が使う製法はイメージとあまりにも違うので習得出来ませんでした。ただ原料の製造方法(朱泥)を習得しました。万古焼は白土が主原料でしたが、この土が枯渇の危機に瀕したため、現在では簡単に手に入る黒土を使う事にしました。しかし、この土では従来製法が使えませんでした。そこで周辺の産地で可能な技法を募集したり探したりし、岐阜県の犬山の温故焼の轆轤製法を採用することにしました。それは轆轤を使いこなして作るものです。それには美濃赤坂で技術を習得する必要がありました。そのため多くの職人が大垣まで行き、3~4年修練し、初めて横手の急須を造れるようになりました。轆轤と横手が一般的になりました。この横手は、手の方に重みがかかるので苦勞しました。日本独自の製法です。中国の茶壺は、形のモデルが決められていたので小さな加工の変化はありましたが、形に名前が付き今でも同じ型が作られています。一方日本では原料から焼成まで一貫性で作っていた窯元は、色々な形の物を作ってきました。



↑江戸時代の急須 青木米他

温故焼 末裔



↑1919年バウハウスドイツの国立総合造形学校。

石仙

舜園



万古焼型造り 明治

中から分解していく



初めて作られた茶壺レプリカ

中国の茶壺の製作 (紫砂宜興の茶壺)

万古焼は紫泥と呼ぶ